

小児の二次性骨粗鬆症と骨代謝回転

○ 木村エミ、松田容士子、坂本淑子、牧憲司、木村光孝：九歯大・口腔機能発達学分野

【目的】ステロイドにより、二次性骨粗鬆症を惹起したWister系雄ラット下顎骨において、ビスフォスフォネート療法による骨の内部構造を力学的に解析した。

【方法】8週齢のWister系雄ラット50匹を無作為に次の5群に分けた。Co-6群は6週間標準飼料で飼育した。St群は6週間1日おきにステロイド投与を行いながら標準飼料で飼育した。Co-9群は9週間標準飼料で飼育した。StSC群は6週間1日おきにステロイド投与を行いながら標準飼料で飼育した後、次の3週間は標準飼料のみで飼育した。StSCBp群は6週間1日おきにステロイド投与を行いながら標準飼料で飼育した後、次の3週間は毎日ビスフォスフォネート投与を行いながら標準飼料で3週間飼育した。飼育終了後、全ての群の下顎骨を採取し、PDS-15を用いた2次元骨密度（骨塩量）測定、3次元的手法による末梢骨定量的CT（pQCT）法による皮質骨と海綿骨の骨密度・骨塩量・骨断面積・骨強度測定を行い、さらに高周波プラズマ発光分析装置を用いてCa,P,Mg,Znの定量分析を行った。

【結果】PDS-15において、StSCBp群がStSC群より高値で有意差が見られた。pQCTでは、StSCBp群の海綿骨の一部を除いた全ての骨パラメーターがStSC群のそれより高値となり有意差がみられ、骨強度でもStSCBp群のxSSIの値はStSC群のそれより著明に大きい値となり有意差があった。Ca,PにおいてStSCBp群がStSCBp群より著明に高値となり有意差がみられた。

【考察】ステロイド投与により二次性骨粗鬆症を惹起した下顎骨は、発生学的にも機能的にも特殊な組織であり常に咬合・咀嚼能力を有することから、ビスフォスフォネートによって骨質と骨強度が改善されたと考えられる。

今日からできるアオドボカシー
プラスチックチューブによる乳歯外傷について（その2）

○ 藤原卓、佐々木洋^{*1}、早川龍^{*2}、中村弘之^{*3}、丸山進一郎^{*4}、田中英一^{*5}、坂井正彦^{*6}、吉田昊哲^{*7}、井上美津子^{*8}

長大院・医歯薬・小児歯、^{*1}UTAKA DENTAL OFFICE 佐々木歯科、^{*2}早川歯科医院、^{*3}ナカムラ矯正・小児歯科、^{*4}アリスバンビーニ小児歯科、^{*5}田中歯科クリニック、^{*6}坂井小児歯科、^{*7}南山手小児歯科、^{*8}昭和大・歯・小児歯

【緒言】私達にとってヘルスプロモーションは必須の課題ですが、いざ実践となると連携の構図を意識してしまい、多少なりとも躊躇いを感じます。では既成の概念を捨てて、「できることから」「かかわりで皆が高まる」「形にこだわらない」といった活動ならどうでしょう。解決困難な障害に出会っても、子どもの論理的行動は未熟です。しかしこんな状況でも発育系職種にとってなら、子どものアドボケイト(代弁者)を演じることは容易です。

【課題】最近プラスチック製チューブによる乳歯外傷が増えているとの声を聞きます。今まで報告例が殆どなかったために、初めて遭遇した場合には現症の把握さえ困難かもしれませんが、原因さえ判別できれば、臨床での対応は比較的容易です。しかし外来での処置だけが私たちの役目なのでしょうか。世界中の乳幼児に受傷する危険があり、子どもと家族は発生の根絶を願っています。乳幼児の事故を課題とするヘルスプロモーションなら、予防やプロパガンダも重要な対策です。連携も地域にとどまらずに産業界も含めた広がりが必要かもしれません。それにはどのような戦略が相応しいのでしょうか。

【活動報告】そこで、全国の有志によって始めた原因究明と事例の収集活動を報告します。演者らが遭遇した事例は決して少なくなく、同じ趣旨で多くの地方会で発表を行うことになりました。問題解決のために、皆さんの参加を呼びかけたいと思います。